

教育課題研究

今と将来をよりよく生きる子どもの育成を目指す教育の在り方

～子どもの学びを確かにするカリキュラム・マネジメントの検討～

研究のまとめ

2025年3月

宮崎県立みやざき中央支援学校

目 次

ページ

1	研究主題	1
2	主題設定の理由	
3	研究の目的	
4	研究の仮説	
5	研究方法と内容	
6	研究の実際	4
7	研究のまとめ	22

卷末資料 1 年間指導計画

- ① 「日常生活の指導」
- ② 「生活単元学習」
- ③ 「国語」
- ④ 「算数・数学」
- ⑤ 「音楽」
- ⑥ 「図画工作・美術」
- ⑦ 「体育・保健体育」
- ⑧ 「特別活動」

2 研究通信 (第9号～第15号)

1 研究主題

「今と将来をよりよく生きる子どもの育成を目指す教育の在り方
～子どもの学びを確かにするカリキュラム・マネジメントの検討～」(2／2 か年)

2 主題設定の理由

学習指導要領が改訂され、2020 年度の小学部における全面実施を皮切りに、2021 年度は中学部、そして高等部においては 2022 年度入学生から順次実施されることは、周知のとおりである。

本校は昨年度まで、「豊かに生きる児童生徒の育成を目指す新たな学びに対応する教育の在り方～新学習指導要領を踏まえた授業づくりをとおして～」を研究主題として、「現行の学習指導要領に基づいた教育内容の充実」、「新たな学びに対する教育の在り方」、「ICT 機器を活用した学習活動の充実」の三つの課題について取組を行ってきた。その結果、ICT 機器の活用について学校としての基礎作りができ、新たな学びに対する教育についても外部人材の活用など様々な検討が行われ、一定の成果が見られた。一方で、現行学習指導要領に基づいた教育活動の充実という面においては、本校の教育活動の基盤となる年間指導計画について、カリキュラム・マネジメントの視点を踏まえた際、その内容や活用について検討が不十分であり、課題が残る内容となった。

管理職や教務主任、小学部・中学部・高等部の各学部主事との話し合いの中では、「学習指導要領に十分に対応した教育課程になっているかについて検討が不十分であり、年間指導計画や学習評価など、改善や見直しをしていく必要がある」、「知的障がいのある児童生徒の教育についてあまり経験が無かったり、初めて担当したりする職員の割合が多くなり、知的障がいのある児童生徒の指導や特別支援学校の学習指導要領などについてより十分に理解する必要性がある」という 2 点が、本校の喫緊の課題として挙がってきた。そこで、上記の研究主題を設定し、2 か年計画で研究を行うこととした。

3 研究の目的

学習指導要領に対応した教育課程、教育活動の見直しをすることで、小学部から高等部までの学びの連続性を重視した一貫性・系統性のある指導につなげる。

また、現行の学習指導要領の理解や知的障がいのある児童生徒の指導についての研修を計画・実施し、学校全体の特別支援教育の専門性を高めることで、日々の指導支援の充実を目指す。

4 研究の仮説

小学部から高等部までの 12 年間の年間指導計画の作成を行うことで、子どもの学びを確かにする基礎づくりとなり、カリキュラム・マネジメントの充実を図ることができるのでないか。

また、学校全体で特別支援教育に関する研修を計画的に実施していくことで、職員全体の専門性をより高めることができ、今と将来を見通した日々の指導実践へつなげていくことができるのではないか。

5 研究内容と方法

まず、令和5年度の研究概要と課題について、以下に述べる。

令和5年度は、学校全体で年間指導計画の作成に取り組んでいくために、本校の各学部の年間指導計画の現状と課題の整理を行った。

年間指導計画は、学習指導要領総則において記載されている「各学校においては次の事項に配慮しながら学校の創意工夫を生かし、全体として、調和のとれた具体的な指導計画を作成するものとする（文部科学省、2018）。」を根拠として作成するものとされている。また、年間指導計画の内容については、学習指導要領解説総

則編において、「指導目標、指導内容、指導の順序、指導方法、使用教材、指導の時間配当等を定めた具体的な計画」と示されており、授業につながる指導方法や使用教材も含めて具体的な指導へ重点を置いて作成されるものが指導計画である。これらの内容から、年間指導計画に必要な項目を「指導目標（3つの柱）」、「指導内容」、「指導の順序（時期）」、「指導方法」、「使用教材」、「指導の配当時間」として、現在、本校で活用されている年間指導計画についてそれぞれの項目が含まれているかどうかを調べた。

その結果、学校全体でみると、3つの柱で整理された「指導目標」は14%しか項目に含まれておらず、すなわち、年間指導計画に14%しか3つの柱で整理された「指導目標」が記載されていないということが分かった。また、学部別では、小学部では、「指導の順序」や「指導の時間配当」は80%以上年間指導計画に記載されていることが分かったが、それ以外の項目は50%以下であった。中学部では、「指導内容・方法」、「指導の順序」は80%以上記載されているが、それ以外は30%から80%の間であった。高等部では、中学部と同様の結果であったが、3つの柱で整理された指導目標の設定はなされていないことが分かった。各学部の年間指導計画は、各教科等で様式が異なるものもあり、同じ学部であっても、各教科等によって年間指導計画に含まれている項目に差がある状態である。

以上の結果等から、現行の学習指導要領に沿って本校の年間指導計画を見直した際に、以下の3点について課題があると考えられた。1点目は、現行の学習指導要領へ移行する際に、小・中・高等部それぞれに校内研究等で検討が行われているが、学部毎の取組であり、進歩状況に差があること。2点目は、小・中・高等部それぞれに年間指導計画の様式があり、学校全体で統一した様式になっていないこと。3点目は、学校全体としての検討が十分行われておらず、小・中・高等部全体を見たときに、学びの系統性が十分に整理されていないことである。

このような本校の年間指導計画の現状と課題から、令和5年度は、職員全体でこれらの課題に気付き、同じ方向性で校内研究を進めていくために、小学部から高等部の縦割りでグループ編成をし、12年間を見通した単元・題材配列表を作成した。なお、校内研究の限られた時間の中で作成していくため、各教科等全ての単元・題材配列表を作成するのではなく、小学部から高等部まで教育課程に位置付けられている日常生活の指導、生活単元学習、国語、算数・数学、音楽、図画工作・美術、体育・保健体育、特別活動の8つについての整理とした（「令和5年度研究のまとめ」参照）。

令和5年度の成果と課題としては、単元・題材配列表を作成することができたものの、年間指導計画の様式や、各教科等の単元・題材の具体的な指導内容の検討を行うまでには至らなかった。単元・題材配列表については、各教科等、領域のそれぞれの特性があり、単元名の羅列となり12年間の系統性までは示すことが難しいものや、学習内容表に近い内容の表となったものもあった。しかし、作成を進めていく過程では、学部間で指導内容や授業づくりについて情報交換することができたり、学部間の繋がりが年計には必要だという課題意識を共有したりすることができ、学校全体で同じ方向性で研究を進めていく上で有意義な時間となった。

また、令和5年度は、これらの研究と平行し、教育課程や教育活動の見直しに必要な基礎的・基本的な研修内容や研修形態を検討して実施した。全体研修だけでなく、ニーズ研修、オンデマンド型の動画視聴による研修等を行ったことで、事後アンケートでは、自身の専門性の向上や児童生徒の指導支援に役立ったとの回答が多く得られた。

以上の令和5年度の研究概要と課題を踏まえ、令和6年度の研究を行うこととした。

（1）研究Ⅰ

年間指導計画の作成に向けて、小学部から高等部まで一貫性・系統性のある年間指導計画の様式検討を研修部や管理職、教務部で行った上で、令和5年度と同様の8つの班を編成し、年間指導計画の作成を行った。

表Ⅰの研究計画の通り、7月までに2回年間指導計画の様式を検討する会を設定した。その後は、学校全体で共通した年間指導計画の様式に基づいて、記載する内容の検討や作成作業の時間をとし、グループ別での研究

の時間を8回設定した。

(2) 研究2

本校は職員数が多く、特別支援教育の経験や専門性もそれぞれ異なるため、複数のニーズに応じるために、様々な形態での研修を実施した。そして、研修動画の視聴回数・時間や職員アンケートの結果を基に必要性や有効性などの検証を行った。研修の形態としては、学校全体で行う悉皆研修、オンデマンド型の研修やニーズ研修等の任意研修、研究通信等の情報発信による修養研修とした。

表1の研究計画には、研修内容については、悉皆研修等の実施について記載している。任意研修となるニーズ研修については、会議等がない教材研究・自己研修の時間に設定することとした。

表1 令和6年度の研究計画

回	日付	時間(分)	内容	
			全校職員	研究担当者等
1	4/ 4(木)	13:30~(50)	第1回 研究推進委員会(今年度の研究について-概要-)	
2	4/19(金)	15:00~(50)	全体研修「特別支援学校の教育課程(教科別の指導・各教科等を合わせた指導)」 講師 校長 出水 悅二	
3	5/14(火)	16:15~(35)	令和6年度 校内研究 全体会	
4	5/31(金)	15:00~(50)	全体研修「知的障がい教育における目標設定と学習評価について」 講師 教育研修センター 指導主事 川畠 恵理 氏	
5	6/ 4(火)	16:15~(35)	選択研修Ⅰ (NISE 学びラボ等)	研究担当者会(年間指導計画の様式検討①)
6	7/ 1(月)	16:15~(35)	選択研修Ⅱ (NISE 学びラボ等)	研究担当者会(年間指導計画の様式検討②)
7	7/ 9(火)	16:15~(35)	選択研修Ⅲ (NISE 学びラボ等)	第2回 研究推進委員会(今年度の研究について-詳細-)
8	7/24(水)	15:30~(50)	校内研究①	校内研究①
9	7/25(木)	10:00~(50)	校内研究②	校内研究②
10	8/21(水)	11:00~(50)	校内研究③	校内研究③
11	8/23(金)	研修①11:00~11:50 研修②13:30~14:20 研修③14:30~15:20	全体研修「現行の学習指導要領が示す知的障がい教育特別支援学校におけるカリキュラム・マネジメントの考え方」 研修①「知的障がいのある児童生徒の学習上の特徴と基礎的対応」 研修②「知的障がい教育の各教科や各教科等を合わせた指導について」 研修③「知的障がいを伴う自閉症児への支援」 講師 やまぐち総合教育センター ふれあい相談センター 研究指導主事 真部 信吾 氏	
12	9/26(木)	16:15~(35)	校内研究④	校内研究④
13	10/25(金)	15:00~(50)	校内研究⑤	校内研究⑤
14	11/12(火)	16:15~(35)	校内研究⑥	校内研究⑥
15	12/ 9(月)	16:15~(35)	校内研究⑦	校内研究⑦
16	1/ 6(月)	13:30~(50)	校内研究⑧	校内研究⑧
17	1/17(金)	15:00~(50)	令和6年度 校内研究 全体報告会	
18	1/24(金)	16:00~(50)	選択研修Ⅳ (NISE 学びラボ等)	研究担当者会(研究のまとめ作業等)
19	2/20(木)	16:15~(35)	選択研修Ⅴ (NISE 学びラボ等)	研究担当者会(研究のまとめ作業等)
20	3/ 3(月)	16:15~(35)	選択研修Ⅵ (NISE 学びラボ等)	第3回 研究推進委員会 (今年度の研究のまとめ、次年度の研究について)
21	3/18(火)	16:15~(35)	出張報告会(仮)	

6 研究の実際

(1) 研究I

ア 年間指導計画の様式

年間指導計画を作成する枠組みとしては、各教科等それぞれについて、各学年1つずつ年間指導計画を作成し、課程別には作成しないこととした。本校の教育課程は、知的障がいの程度によって課程を分けているわけではないため、年間指導計画を学年ごと且つ課程別に作成する必要はないと判断したためである。小学部から高等部までの12年間を見通すことができる年間指導計画を作成し、児童生徒の実態に応じた指導内容を選択して活用することができる幅をもたせた年間指導計画となると良いと考えた。また、年間指導計画を作成する際には、小学部1年は小学部1段階の内容、中学部1年は中学部1段階の内容というように、学習指導要領に示された指導内容を12年間の中で履修できるようにすることも確認しながら作成することとした。このことについては、学習指導要領解説総則編(文部科学省、2018)の教育課程の編成における共通的事項に記載されているように、全ての児童生徒に、学習指導要領に示されている各教科の内容を計画的に履修させることを考慮したためである。

年間指導計画に記載する内容については、学習指導要領総則編の指導計画作成等に当たっての配慮事項において、「指導目標、指導内容、指導の順序、指導方法、使用教材、指導の時間配当等を定めた具体的な計画」と示されていることから、これらの項目が記載されるようにした。その中の「指導目標」については、学習評価参考資料(文部科学省、2020)において、「学習指導要領に示す各教科等の『内容』において、内容のまとまりごとに育成を目指す資質・能力が示されている。このため、『内容』の記載はそのまま学習指導の目標となりうるものである」、「主体的に学習に取り組む態度に関しては、特に、児童生徒の学習への継続的な取組を通して現れる性質を有することから『内容』に記載がない。そのため、各段階の『目標』を参考に(以下略)」と示されていることから、各単元や題材で扱う指導内容を学習指導要領に記載された項目に則して記号で表記し、それを指導目標と代えることとした。そうすることで、年間指導計画自体のボリュームを押さえて、見やすく活用し易いものになるとえた。しかし、指導内容を記号で表記するだけでは、育成を目指す資質・能力の3つの柱が分からぬため、教科別の年間指導計画については、記号の表記に加えて、「知識及び技能」に関する内容には下線、「思考力、判断力、表現力等」に関する内容には波線、「学びに向かう力、人間性等」に関する内容には点線を引くこととした。

具体的な本校の年間指導計画の記載内容としては、学部、学年、教育課程、各教科等・領域名、年間授業時数、学習指導要領の段階を様式の上部に記載する。それ以降については、教科別、各教科等を合わせた指導、特別活動で様式を3種類用意した。各教科等を合わせた指導の年間指導計画については、単元・題材名、時期、具体的な指導内容・教材教具等、学習指導要領に示されている関連する各教科等の指導内容を記載することとした。教科別の年間指導計画については、学習指導要領に示された各段階の目標を記載し、その下に、単元・題材名、時期、具体的な指導内容・教材教具等、学習指導要領に示された各教科の指導内容を記載する様式とした。特別活動については、学部ごとに小学校、中学校、高等学校の学習指導要領に準じた目標を人間関係形成、社会参画、自己実現の3つの視点で記載し、時期、題材名、具体的な指導内容・教材教具等、授業形態、各題材の目標を記載することとした。

これらを踏まえた上で、研修部、管理職や教務主任、学部主事を交えて検討を重ね、表1~3の様式で年間指導計画を作成することとした。

表1 各教科等を合わせた指導の年間指導計画の様式(一部)

学部	学年	教育課程	教科等	年間授業時数	段階
学部	学年	教育課程	教科等	年間授業時数	段階
1学期	単元名 (Ⅰ時数/Ⅱ時数)	具体的な指導内容・教材教具等	生活	国語	算数
	「」 (Ⅰ/Ⅱ)				音楽
					図画工作
					体育
2学期					

表2 教科別の年間指導計画の様式(一部)

学部	学年	教育課程	教科等	年間授業時数	段階
小学部	I	II	国語		小学部1段階
目標		学習指導要領に示されている間連する各教科の指導内容			
知識及び技能		日常生活に必要な身近な言葉が分かり使うようになるとともに、いろいろな言葉や我が国の言語文化に触れることができるようとする。			
思考力、表現力、判断力等		言葉をイメージしたり、言葉による関わりを受けめたりする力を養い、日常生活における人の関わりの中で伝え合い、自分の思いをもつことができるようとする。			
学びに向かう力、人間性等		言葉で表すことやそのよさを感じるとともに、言葉を使おうとする態度を養う。			
時期	単元名(Ⅱ時数)	具体的な指導内容・教材教具等			学習指導要領に示されている指導内容
1学期	「」()				

表3 特別活動の年間指導計画の様式(一部)

学部	学年	教育課程	教科等	年間授業時数
小学部		I・II	特別活動	I 35/II 35
目標		集団や社会の形成者としての見方・考え方を働きかせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。		
人間関係形成		多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となるについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。		
社会参画		集団や自己の生活、人間関係の課題を見いだし、解決するために話し合い、合意 形成を図ったり、意思決定したりすることができるようとする。		
自己実現		自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、主体的に集団や 社会に参画し、生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての在り方生き方にについての自覚を深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。		
時期	題材名(時数)	具体的な指導内容・教材教具等	授業形態	各題材の目標
1学期	「」()			

イ 班別研究

令和5年度の小学部から高等部までの縦割りの班を再編成し、年間指導計画を作成した（巻末資料）。以下、表4から表11に各グループの研究の実際と課題について、報告書として示す。

表4 ①日常生活の指導 研究班 研究報告書

班別研究の実際	<p>【進め方】</p> <p>○班別研究①は、今年度の研究の流れを確認し、昨年度から作成している「12年間の学びの配列表」の加筆・修正を行った。(全体)</p> <p>○班別研究②は、実際にどのように進めていけばよいかイメージが持てるように、題材を一つ決め、年間指導計画の中の「具体的な指導内容・教材教具等」や「学習指導要領に示されている関連する各教科の指導内容」について考えた。(全体)</p> <p>○班別研究③～⑦では、年計作成を進める作業を行った。疑問点等ある場合はその都度出していただき、必要があれば全体で共有した。(学部ごと※個人作業も含む)</p> <p>○班別研究⑧では、出来上がった年計を共有し、学部ごとに大変だったこと等話していただいた。(全体)</p> <p>【年計の見方】</p> <p>○「12年間の学びの配列表」をもとに「登校」「朝の活動」「身だしなみ」「給食」「清掃」「排泄」「健康・安全」「帰りの活動もしくは午後の活動」「下校」の題材名を設定した。昨年度までの反省で「着替え」について新しく設定するかどうかを最初に協議した結果、「身だしなみ」として着替えを含む身なり全般について考えていけるようにした。</p> <p>○年計の右側にそれぞれの指導内容と各教科どの部分と関連しているかを記載している。実際の指導場面では、その部分を参照しながら児童生徒の実態に合わせて、目標設定に活かしていくとよい。</p> <p>【年計を作成して】</p> <p>○少ない人数の中で年計作成が終わるのか不安だったが、なんとか作成することができて良かった。</p> <p>○各学部、学年ごとに作成していく。それぞれの学年を担当する職員が、その学年の年計を作ることができると良かったが、該当職員がおらず、苦慮した部分もあった。</p> <p>○中学部、高等部2年は1,2段階が混ざっていたので、作成が難しかった。</p> <p>【参考資料】</p> <ul style="list-style-type: none">・特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（小学部・中学部）・特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（高等部）・相馬支援学校 各教科12年間を見通した学び・広島県立福山北特別支援学校 年間指導計画・せいかつ☆ せいかつ☆☆ せいかつ☆☆☆ 教科書解説・「日常生活の指導」の実践
今後の課題	<p>○「学習指導要領に示されている関連する各教科の指導内容」については埋めるのが難しい箇所もあった。今後実際に活用していく中で、アイデアを出し合いながら、この部分がもっと深められると良い。</p> <p>○共有の時間が少なかったので、もっと全体での活動も取り入れられると良かった。</p>

表5 ②生活単元学習 研究班 研究報告書

班別研究の実際	<p>【進め方】</p> <p>○学部ごとに分かれ作業を進めた。各学部1年生の単元をひとり2単元ずつ割り振り、主に個人作業で指導内容や教材等の整理を進めた。</p> <p>○10月25日に全体で様式や内容の検討を行い、全学部で様式をそろえる方向になった。担当の単元の加筆修正を進めながら、未完成の単元の作業も進めた。</p> <p>○個人で進めた単元を一つの書式にまとめ、抜けている部分がないかを学部ごとに確認したところ、他の単元と統合した方が良い単元や他教科に移行した方が良い単元があった。そのため、1月6日はその分別作業を行った。</p> <p>〈課題〉</p> <p>① 学部によって書き方が異なっていた。</p> <p>② 理科の要素が強い単元があるが、前年度の年間指導計画には記載されていないため、1から作成することが難しい。また、「12年間の学びの配列表」の生单の中に、題材が単元として表記されていた。</p> <p>〈解決策〉</p> <p>① 「関連する各教科等の内容」の部分については、「<u>知</u>1(力) <u>思</u>1A 聴く・話すウエ <u>思</u>2B 書くアイ」のような書き方でそろえた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導内容は大まかな内容だけでなく、具体的に何をするかを示した。また、教材教具等の欄を分け、どの内容で何が必要かを見やすくした。 ・関連する各教科等では、学習指導要領の指導内容を調べやすくするため、記入の仕方をそろえた。 <p>② 教科的要素が強く、バラバラになっていた単元を一つにまとめ、年間を通しての大単元にしたり、他の単元や他教科に統合したりすることで、題材を単元にすることことができた。</p> <p>【参考資料】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領解説各教科等編 ・広島県立廿日市特別支援学校12年間の単元配列表・単元内容一覧表 ・本校12年間の学びの配列表(令和5年度作成)
今後の課題	<p>○今回、1年生の年間計画を作成し、2年生以降はそれらを参考に作成するとよいと考え、各学部1年生のみの協議を進めてきた。しかし、各教科との関連が多いため、整理をすることが難しく、2年生以降は作成しきれなかった。</p> <p>○時数の記載もできていない単元がある。実施しながらの調整になると考えられる。</p> <p>○学習の漏れ、記載の不備の可能性があるため、活用する中で加筆修正を行いたい。</p>

表6 ③国語 研究班 研究報告書

班別研究の実際	<p>【進め方】</p> <p>○小学部、中学部は星本の教科書解説を参考に、高等部は「暮らしに役立つ国語」のテキストやワークを参考に昨年度作成した12年間の学びの配列表の加筆修正を行った。</p> <p>○小学部1・2年、3・4年、5・6年、中学部、高等部のグループに分かれて、学びの配列表を基に年間指導計画の作成を行った。</p> <p>○小学部は1・2年生がこくご☆、3・4年生がこくご☆☆、5・6年生がこくご☆☆☆の教科書解説を参考に、中学部は国語☆☆☆☆、国語☆☆☆☆☆の教科書を参考にした。</p> <p>【年計の見方】</p> <p>○小学部は教科書の内容に加えて、年賀状や暑中見舞いなどの季節の手紙に関する学習や絵日記発表などの学習を加えている。</p> <p>○中学部は、教科書の単元を学習内容で整理したのち、各学年でバランス良く学習ができるよう配置して作成している。</p> <p>○高等部はテキストとワークの内容を見比べながら、日常生活や学校行事、実習等に必要で実践的な内容を繰り返しまたは段階的に学習できるようにしている。</p> <p>○表の下段に年間を通しての内容も記載している。各学級の実態に応じて授業に取り入れるようにする。</p> <p>【参考資料】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（小学部・中学部） ・特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（高等部） ・大分県立さくらの杜 高等支援学校 R6年度基本的な考え方及び年間指導計画 ・広島県立福山北特別支援学校 令和4年度年間指導計画 ・文部科学省 学習評価参考資料 ・文部科学省 こくご☆ こくご☆☆ こくご☆☆☆ 教科書解説 ・文部科学省 国語☆☆☆☆ 国語☆☆☆☆☆ 教科書解説 ・学習レディネス指導シリーズ1 読みを育てる ・学習レディネス指導シリーズ2 書きを育てる ・改訂新版 暮らしに役立つ国語 東洋館 ・暮らしに役立つワーク国語 東洋館
今後の課題	<p>○研究の後半は各グループによる作業で終わってしまったので、全体で共有し、学習内容の見比べや検討までできると良い。</p> <p>○今回作成した年間指導計画は教科書の内容を整理し、まとめるにとどまっているので、より具体的な学習内容や教材教具を検討していく必要がある。</p>

表7 ④算数・数学 研究班 研究報告書

<p>班別研究の 実際</p>	<p>【進め方】</p> <p>第1回 (グループ全体)</p> <p>○研究主任からのお話</p> <p>○昨年度までの流れの説明(松本栞奈先生より)</p> <p>○算数・数学班担当者より今後の校内研究の大まかな流れの説明と質問タイム</p> <p>○話し合ったことや会で出た意見、お願ひ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度作成した「12年間の学びの配列表」の見直しが必要であるが、ある程度、見直しをした後、配列表が年間指導計画を作成する際の参考資料になるのではないか。 ・算数・数学担当からのお願い…各学部に連絡係1名を設けた。(小学部:松本栞奈先生、中学部:栗原真輝先生) <p>第2回 (グループ全体→各学部→グループ全体)</p> <p>○「12年間の学びの配列表」の見直し</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各学部に分かれて配列表の見直しを行った。 ・使用した資料は【参考資料】を参照 <p>○実際、学部毎に年間指導計画を作成し、分からぬところは質問をしてもらった。</p> <p>第3回～第6回 (各学部)</p> <p>○年間指導計画作成</p> <p>第7回 (グループ全体)</p> <p>○全体で現在仕上がっている年間指導計画を確認する時間を設けた。また意見交換や今年度の校内研究の課題等を出していただいた。(課題は下記の今後の課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これから統一する箇所…☆本のページ数、中学部2年と高等部2年の目標の書き方や 一段階、二段階の書き方の統一、単元時数 <p>第8回 (各学部)</p> <p>○年間指導計画仕上げ及び提出</p> <p>【年計の見方】</p> <p>○学期毎に時数を入れたため、1年間の見通しがもてる年間指導計画であると考える。また、年間指導計画の「具体的な内容」の横に「教材・教具等」を入れたことにより、すぐに使える年間指導計画ではないかと思う。算数・数学は児童生徒の実態差が大きい教科であるため、12年間を見通して指導できる年間指導計画になったのではないかと考える。</p> <p>【参考資料】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・12年間の学びの配列表、学習指導要領、☆本他各学部で使用している教科書・指導書・解説書、福島県立相馬支援学校算数・数学年間指導計画
<p>今後の課題</p>	<p>○時数は主觀で分けているので来年度、実際に授業を行ってみて改善する必要がある。また、児童生徒の実態によっては、単元内容を見て時数の分配を実態に合わせて変えることが必要があり、そのことについて共通理解が大切ではないかと考える。</p>

表8 ⑤音楽 研究班 研究報告書

<p>班別研究の 実際</p>	<p><方法></p> <p>○初回に下記の事項を確認後、学部に分かれて年計作成に取り組んだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作成の流れ ①現行の年計を新しい様式に挿入 ②学習指導要領の内容と照らし合わせながら見直す ③学習指導要領の各段階の目標および指導内容の確認(特に中学部、高等部) ○学部や学年に分かれての作成が主だが、疑問点、共通理解が必要な点などが出てきたら、その都度確認し共有できるよう、毎時間全員で集まって年計作成にあたった。 <p><内容></p> <p>○年計を作成していくなかで、以下の点で共通理解を図った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「具体的な指導内容・教材教具等」の欄は「指導内容」と「使用楽曲、教材教具など」に分けて記載。 ・指導内容の文言→「(児童生徒が) ~する」等に統一。 ・指導内容を「音楽遊び」「歌唱」「音楽づくり」「器楽」「身体表現」「鑑賞」「創作」の項目で分けて記載。 ・現行の年計になかった使用楽曲は赤字にて追記する。 ・小学部→☆本の楽曲があまり取り扱われていなかったので、取り入れる。 ・高等部→題材名に目標も明記する。 <p><成果></p> <p>○新しい様式に打ち換えることで、指導内容を整理することができた。</p> <p>○見てわかりやすい年計にするための意見が挙げられ、音楽科ならではの書式の工夫をすることができた。</p> <p>【参考資料】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学校学習指導要領解説各教科編（小学部・中学部） ・特別支援学校学習指導要領解説知的障害者教科等編（上）（高等部） ・おんがく☆、☆☆、☆☆☆、音楽☆☆☆☆、☆☆☆☆☆指導書 ・音楽 I Tutti 解説編、音楽 II Tutti 解説編、音楽 III ・MOUSA① ・福島県立相馬支援学校年計 ・熊本大学教育学部附属特別支援学校指導内容確認表 ・日向ひまわり支援学校年間指導計画 ・小学部過去の使用楽曲一覧
<p>今後の課題</p>	<p>○今年度は新様式への打ち込みに時間を費やした。これまでの指導内容を整理できた反面、以下の点について今後深めていく必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・題材の見直し… 12年間を見通した学びになっているか ・指導内容の再検討… 系統性のある指導内容になっているか、教材曲の選定（共通教材の取り扱い）など <p>○作成した年計に沿った実践をしながら、上記について検討していく。</p>

表9 ⑥図画工作・美術 研究班 研究報告書

班別研究の 実際	<p>【進め方】</p> <p>○7/24 研究主任からの全体説明後、各学部に分かれて作業開始した。2, 3, 4, 5回目は学部ごとの作業とし、題材名・指導内容の検討と指導内容・教具教材の検討を行った。</p> <p>○11/12 6回目の校内研の時間に1度集まり、学習指導要領の内容記入の確認と学習評価参考資料の表記に合わせての下線の引き方について全体で確認した。</p> <p>○その後、7.8回目は各学部の班作業とし、12/25を提出期限とした。</p> <p>○中学部・高等部は教科担当の先生方だったため、学部ごとの個人作業で進めていただき、小学校部は5名で共同作業を行った。</p> <p>○1/6 最終日に学部ごとに作成した年計を互いに説明して、共有しあった。</p> <p>【年計の見方】</p> <p>○小学部1.2.3段階の題材は、小学校の図工の教科書（開隆堂1.2年上下と3.4年上下）から採用した。その教科書は題材ごとにQRコードから、タブレット端末などをを利用して、学習内容や用具の使い方を動画で確認できる。</p> <p>○小学部には、美術科の先生がいないので、どのように授業を進めていけばよいのか悩むことが多かったが、今後は授業がしやすくなると考える。研究をきっかけで、小学部に図画工作の教科書（開隆堂）を購入することになった。</p> <p>○中学部1.2.3年で共通して扱う題材を取り入れた。1学期はネームカードとクラスプレート2学期は版画3学期は作品バッグというように学期ごとに決めた。</p> <p>○高等部の美術は1年生で素材・技法を楽しむ、2年生は高文祭に出展する、3年生は卒業後の余暇につながる題材を取り入れていった。</p> <p>○高等部には、今まで細かい年間指導計画があったが、今回作成したものは、美術科の職員が自分の得意分野でアレンジできるような年計になり使いやすくなったと考える。</p> <p>【参考資料】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学校学習指導要領解説各教科編（小学部・中学部） ・特別支援学校学習指導要領解説知的障害者教科等編（上）（高等部） ・福島県立相馬支援学校年間指導計画 ・熊本大学教育学部附属特別支援学校指導内容確認表 ・図画工作学習指導書特別支援版 ・小学校図画工作教科書 開隆堂出版
今後の課題	<p>○図画工作・美術については、教科の特性として、表現方法や材料、道具等に限りがない。また、年間指導計画に記載している内容（言葉）だけでは、実際にどのような作品になるのか等のイメージもつきにくい。そのため、今後は授業の様子や児童生徒の作品を写真等で記録していくといい。</p>

表10 ⑦体育・保健体育 研究班 研究報告書

<p>班別研究の 実際</p>	<p>【進め方】</p> <p>○初回はグループ全体で、作成方法についての説明を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作成方法 <ul style="list-style-type: none"> ①現行の年計を新書式に挿入 ②学習指導要領の内容と照らし合わせながら見直す（学習指導要領に記載されている内容が網羅できるようにする。） <p>○2回目からは各学部に分かれての年計作成作業を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学部ごとの作業だが、同じ部屋で作業を行い、共通理解が必要な点などが出てきたらその都度確認し共有できるようにした。 <p>【年計の見方】</p> <p>○基本的には各学部で使いやすいものを意識しながら、学部ごとに書き方を工夫しながら作成を行った。</p> <p>○「具体的な指導内容・教材教具等」の欄は、できるだけ簡潔に分かりやすく記入することを意識して作成した。</p> <p>○「年間を通して」の欄に、「朝の運動」「健康診断」「身体測定」の内容と34回+保健分野の内容を入れることにした。</p> <p>【参考資料】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・過去の本校の年間指導計画 ・特別支援学校学習指導要領解説各教科編（小学部・中学部） ・特別支援学校学習指導要領解説知的の障害者教科等編（下）（高等部） ・福島県立相馬支援学校年間指導計画 ・熊本大学教育学部附属特別支援学校指導内容確認表
<p>今後の課題</p>	<p>○今年度はこれまでの年間指導計画を新書式に落とし込む作業が主で、学習指導要領の内容の網羅や学部間での細かい部分での書式の統一などの作業ができなかつた。次年度は学習指導要領の内容を基本にした指導内容の設定や精査などの作業が必要である。さらに、細かい部分での学部間の書式の統一が必要である。</p> <p>○保健の内容について、特別活動や日常生活の指導との重複の有無や記入の仕方等について更に検討が必要である。</p>

表Ⅺ ⑧特別活動 研究班 研究報告書

<p>班別研究の 実際</p>	<p>【進め方】 ○昨年度の協議で挙げられた課題解決を目指しながら、各学部で年間指導計画の作成を行った。 〈課題〉 ○特別活動にて計上されている学習は、学級活動、せい教育、進路学習、主権者教育、人権教育等、多岐にわたり、すべての学習について、いつ、どのように行うのか把握が難しい。 ○学級活動の年間指導計画がないことや学級活動は1時間目に設定されていることが多い、現状朝の支度や着替え、朝の会で終わってしまい、学級活動としての学習が実践できていない。 ○同じ学習内容であっても学部によって取り扱いが違う。例えば、対面式は中学部、高3は「学部集会」、高1、高2は「生徒会活動」となっている。また、結団式は小学部「生単」、中学部「保体」、高等部「特活」計上となっている。 ○せい教育について、特別活動で学習するものと、保健体育で学習するとの判断が学部で曖昧である。</p> <p>〈解決策として〉 ○昨年度は特別活動の中でも、学級活動に焦点を当て、小学部1年生から高等部3年生までの12年間の題材配列表の作成を行い、学級活動の学習内容を明確にした。 ○今年度は、昨年度完成させた題材配列表を基に、せい教育、進路学習、主権者教育、人権教育を含めて、新書式への入力作業を行った。 ○対面式、結団式については、教務部会、各学部で今後検討予定。 ○せい教育については、保健体育班と現状を共有し、内容のすみ分けを行った。(学習指導要領「保健体育」に記載のない内容については特別活動のせい教育で行うこととした)</p> <p>【年計の見方】 ○特別活動で計上しているすべての学習について一覧にすることができた。1年間の学習内容の把握に活用する。 ○目標となる三つの視点(人間関係形成・社会参画・自己実現)は、他教科の三つの柱と異なる。学習指導要領特別活動編に示している内容を表記している。 ○月ごとではなく、学期毎に示している。(年度によって違う学習時期に対応できるように)目安として参照する。 ○教材教具の保存場所を示している。各学級の実態に応じて活用する。</p> <p>【参考資料】 ・令和6年度 学校要覧 ・学習指導要領解説特別活動編 ・教育課程編成資料集 Q&A (宮崎県教育委員会)</p>
<p>今後の課題</p>	<p>○学習の漏れ、または他教科との重複等、確認不足の可能性がある。活用する中で加筆修正を行いたい。 ○特別活動班以外の先生方のご意見もお聞きし、加筆修正を加えながら活用できたらと思う。 ○従来通り、せい教育や主権者教育、進路指導、人権教育等の年間指導計画は、各担当の先生方が作成することになる。担当の先生方と連携もとりながら、検証していきたい。 ○今後キャリアパスポート関係の学習が導入される場合、学級活動での取り扱いも検討されるのではないかと思う。その際には、改めて追加修正する可能性がある。</p>

(2) 研究2

研修部では、「研究の目的」にも述べている通り、障がいのある児童生徒の教育に関する専門性を高める研修を行うとともに、職員研修について組織化、体系化を検討し、教育活動の活性化を図ることを目的に、校内研修を行った。

令和5年度と同様に、「それぞれが知りたいことを気軽に、いつでも、どこでも、主体的に学べる」研修体系の構築を目指し、悉皆研修、任意研修、修養研修の研修形態を考慮しながら、5つの取組を実施した。以下に、それぞれの研修の内容と職員アンケートの結果について述べる。

ア 全体研修

校内の全職員に対して校内研究や特別支援教育に関する専門的な知識や理解を深め、職員の専門性の向上を図ることを目的として、表12にあるように3回の全体研修を行った。今年度の研究テーマ「今と将来をよりよく生きる子どもの育成を目指す教育の在り方～子どもの学びを確かにカリキュラム・マネジメントの検討～」に沿って、特別支援教育や知的障がい教育に関する基礎的、基本的な内容の研修を行った。

表12 令和6年度 みやざき中央支援学校 全体研修一覧

日程	テーマ	講師
4月19日(金)	特別支援学校における教科別の指導と各教科等を合わせた指導について	校長 出水 恰二
5月31日(金)	知的障がい教育における目標設定と学習評価について	教育研修センター 指導主事 川畠 恵理 氏
8月23日(金)	現行の学習指導要領が示す知的障がい教育特別支援学校におけるカリキュラム・マネジメントの考え方	やまぐち総合教育支援センター 研究指導主事 真部信吾 氏

その結果(図1)、4月と8月の研修では3~4割の職員が、5月の研修については3割近くの職員が、自身の専門性の向上や児童生徒の指導・支援に役に立ったと回答した。

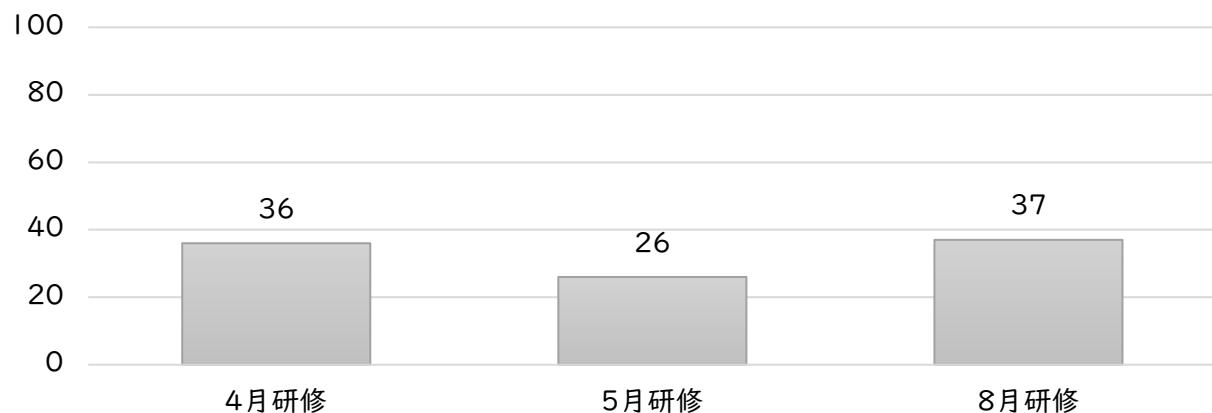


図1 「自身の専門性の向上や児童生徒の指導・支援に役に立ったか」の回答率(%)

イ ニーズ研修(対面によるニーズ研修)

ニーズ研修では、指導・支援におけるニーズを把握し、知りたい内容を届けられるよう、表13のような内容で研修を行った。また、初期研修と兼ねながら講師にとっても負担にならないように配慮した。

表13 令和6年度 みやざき中央支援学校 ニーズ研修一覧

日程	内容	講師
8月5日(月)	子どもたちの個性を伸ばす芸術活動・余暇につながる活動	指導教諭 新城 美由紀 (本校職員)
8月26日(月)	かかわることが困難な児童生徒への指導・支援の基礎と実際	教頭 落合 雅暢 (本校職員)
8月7日(水)	知的障がい特別支援学校における 自立活動および発達障害と不登校との関連	山形大学 准教授 川村 修弘 氏
9月24日(火)	知的障がいのある子供の理解と支援 ～児童生徒の困り感についての基本的な考え方とその対応～	教諭 水野 啓三 (本校職員)
1月17日(金)	障がいの特性に応じた指導・支援	指導教諭 栗原 真輝 (本校職員)

その結果(図2、図3)、昨年度と同様に、職員の半数以上(64名)がニーズ研修に参加しており、参加した職員の8割以上(54名)が「自身の指導・支援に役に立った」と回答した。

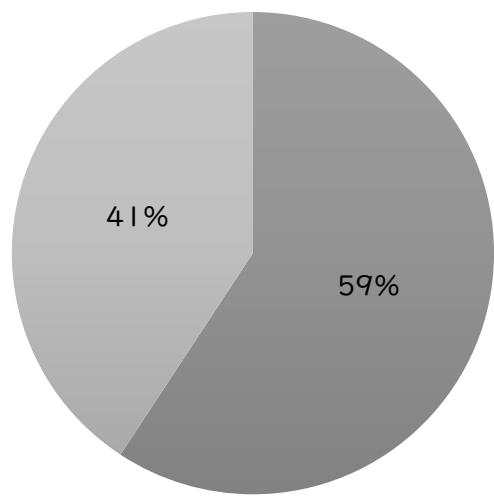


図2 アンケート結果(ニーズ研修への参加)

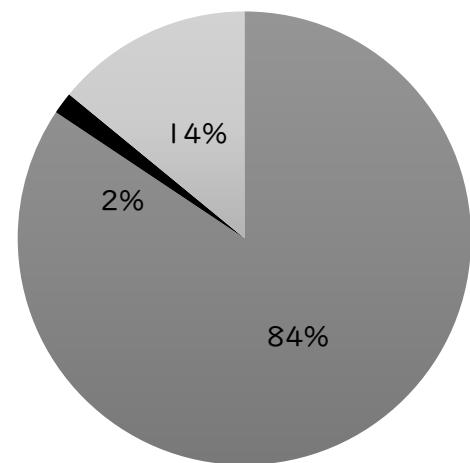


図3 アンケート結果(ニーズ研修が自身の専門性の向上や児童生徒の指導・支援に役立ったか)

ウ NISE 学びラボ（オンデマンドによるニーズ研修）

年度初めに学校として利用申請を行い、県から支給されているメールアドレス（Gmail）で職員全員の利用登録を行った。視聴内容は、全てのコンテンツを見ることができるようになり、視聴開始の案内については、個人のメールアドレスに送付し、各自が好きな時間に好きな場所で見ることができるようにした。

その結果、86名の職員が延べ157回視聴を行っており、合計視聴時間は50時間を超えていた。また、表12にあるように、それぞれのニーズに応じて56のプログラムの視聴があった。活用に関するアンケートの結果（図4、5）では、8割の職員が活用しており、活用した職員の約8割（68名）が「自分の指導・支援に役に立った」と回答した。

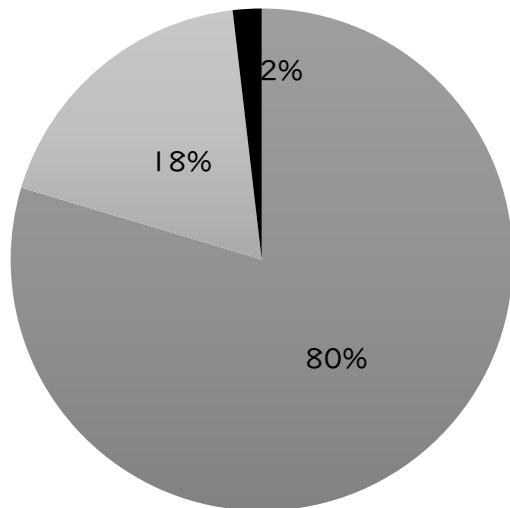


図4 アンケート結果（学びラボの活用）

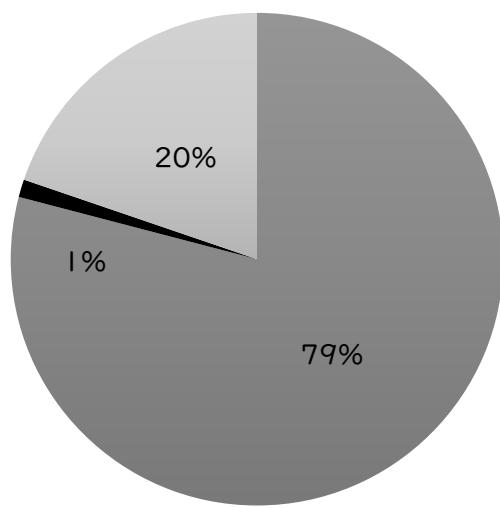


図5 アンケート結果（学びラボが自身の専門性の向上や児童生徒の指導・支援に役立ったか）

次のページ表14にNISE学びラボで、1年間に視聴されたコンテンツ名、視聴回数・時間を整理した。

表14 NISE 学びラボで1年間に視聴されたコンテンツ名、視聴回数・時間(視聴回数順)

講義名	回数	時間
知的障害教育における各教科等を合わせた指導③－生活単元学習、作業学習－	10	1:25:31
医学的理解－行動上の問題・てんかん－	9	4:11:17
特別支援教育におけるICTの活用	8	2:43:03
特別支援教育における教材・教具の活用	8	1:45:16
ADHDのある子どもの理解と対応	6	2:42:37
情緒障害のある児童生徒の指導と対応	6	1:23:13
強度行動障害の理解	5	1:30:50
自閉症のある児童生徒の自立活動の指導	5	2:48:03
ことばの遅れをめぐって	4	1:10:31
知的障害教育における各教科等を合わせた指導②－日常生活の指導、遊びの指導－	4	0:32:29
知的障害教育における自立活動の指導	4	0:43:36
中高美術	4	0:40:13
特別支援教育におけるカウンセリング技法	4	0:55:05
発達障害のある子どもの思春期の課題と支援(前半)	4	1:48:07
LD・ADHD・高機能自閉症等教育概論(1)定義と判断	3	0:27:01
LD・ADHD・高機能自閉症等教育概論(3)特性の理解	3	0:49:48
共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築	3	1:03:57
教育と福祉・医療等との連携	3	1:18:21
合理的配慮と基礎的環境整備	3	1:26:21
自閉症のある子どものためのソーシャルスキル指導	3	1:12:07
自閉症のある子どもの実態把握	3	0:50:41
障害のある児童生徒における学習評価	3	0:31:15
障害のある児童生徒のキャリア教育	3	0:56:05
知的障害教育の各教科における指導の工夫③－指導計画の作成と内容の取扱いの要点 高等部－	3	0:37:35
特別支援教育におけるICFの活用	3	0:32:04
LD・ADHD・高機能自閉症等教育概論(4)特性に応じた指導	2	0:31:27
関係性の障害とその対応	2	0:39:00
吃音の理解と対応－自己肯定感への支援－	2	1:26:02
高等学校段階(思春期)における障害のある生徒の心理と自己理解	2	0:57:09
自閉症のある児童生徒の家族支援	2	0:47:41
障害のある児童生徒等に対する早期からの一貫した支援	2	1:45:06
情緒障害教育概論	2	0:44:22
選択性かん默などの心理的要因が関与する児童生徒の理解と指導	2	0:58:56
知的障害の理解と教育的対応の基本	2	0:48:47
知的障害教育における各教科等を合わせた指導①－各教科等を合わせた指導の考え方－	2	0:19:30
知的障害教育の各教科における指導の工夫①－指導計画の作成と内容の取扱いの要点 小学部－	2	0:20:36
発達障害のある子どもの思春期の課題と支援(後半)	2	0:21:18
LDのある子どもの理解と対応	1	0:00:08
インクルーシブ教育システムにおける専門性と研修	1	0:27:14
インクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(1)障害児教育の歴史	1	0:29:27
検査の意義とアセスメント－アセスメントの目的と意義－	1	0:23:38
個別の教育支援計画と個別の指導計画① 学習指導要領上の位置付けと役割	1	0:29:30
口唇口蓋裂の医療	1	0:17:14
自立活動の指導－指導計画の作成－	1	0:08:00
主な検査の種類と方法及び留意事項－発達検査法と知能検査法－	1	0:29:50
小・中学校に在籍する健康面への配慮が必要な児童・生徒の理解	1	0:23:33
小学校图画工作	1	0:16:12
知的障害教育における教育課程の編成①－知的障害教育における教育課程の考え方－	1	0:13:52
知的障害教育における主体的・対話的で深い学び	1	0:07:30
中高国語	1	0:16:17
中高特別活動	1	0:19:09
聴覚障害児のコミュニケーション	1	0:26:41
通常の学級における個々の子供への指導や支援	1	0:20:55
特別支援教育の視点を生かした学校経営	1	0:23:15
病弱・身体虚弱教育における指導の実際	1	0:23:06
慢性疾患の理解	1	0:25:03

(h:m:s)

エ 研究通信(通信第9号から15号までは巻末資料2を参照 ※この文章は校内ののみ挿入)

令和5年度より、「情報発信・情報共有により、特別支援教育に関する様々なつながりが豊かになり、今後の指導力向上はもちろん前向きな気持ちで児童生徒と接していくこと」、「研究・研修と実践をつなぐ、人と人をつなぐ、人と研究・研修をつなぐ、研究・研修のよさ・楽しさ・面白さを伝える、研究・研修につながる熱い想いをつなぎしていく」を主なテーマとして、それらの内容をまとめた紙面を研究通信として、定期的に校務支援システムを活用して校内職員に配布した(表15)。

表15 令和6年度 みやざき中央支援学校 研究通信月別内容一覧

No.	発行月	内容と執筆担当者	「先生、教えてください」の執筆担当者
9	4月	1年間の通信の予定について 教諭 高野 知紀	
10	5月	今年度の研究について 教諭 佐藤 恵理	指導教諭 田爪 昭宣
11	7月	チームティーチング 指導教諭 田爪 昭宣	教頭 落合 雅暢
12	9月	カリキュラム・マネジメント 教務主任 黒木 桂太	
13	11月	愛着障がいについて 教頭 落合 雅暢	主幹教諭 長友 公彦
14	1月	指導実践 生活単元学習の実際 指導教諭 田爪 昭宣	教諭 濱崎 友樹
15	3月	応用行動分析 教諭 高野 知紀	校長 出水 悅二

その結果、9割以上の職員(101名)が研究通信を読み(図6)、8割以上(82名)の職員が役に立ったと回答した(図7)。読んでみて良かった内容について(図8)は、「校内の先生方の教師になったきっかけなどのエピソード」が最も多く、昨年度ニーズの高かった「愛着障がい」、「生活単元学習の実際」、「チームティーチング」と続いた。今後、読んでみたい内容としては、「これまでに出会った子どもたちとの体験談」、「教師の困り感から児童生徒の事例」、「特別支援教育の動向」、「求められる職員像」、「開校が予定されている高等特別支援学校について」など挙げられていた。また、自閉症スペクトラム障がいやダウン症候群などの基礎的な内容や、愛着障がいについて詳しく知りたい、という要望が上がった。

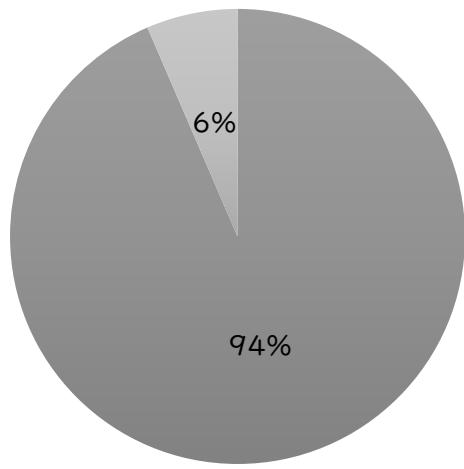


図6 アンケート結果(閲覧の有無)

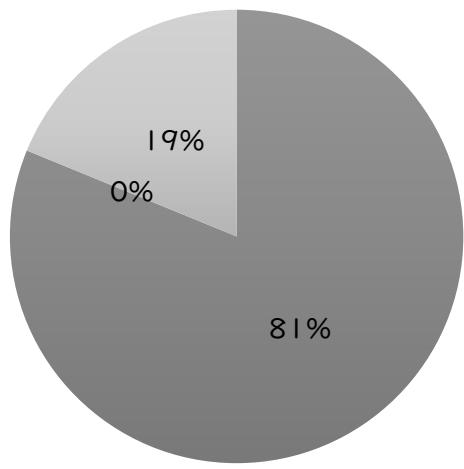


図7 アンケート結果(研究通信が自身の専門性の向上や児童生徒の指導・支援に役立ったか)

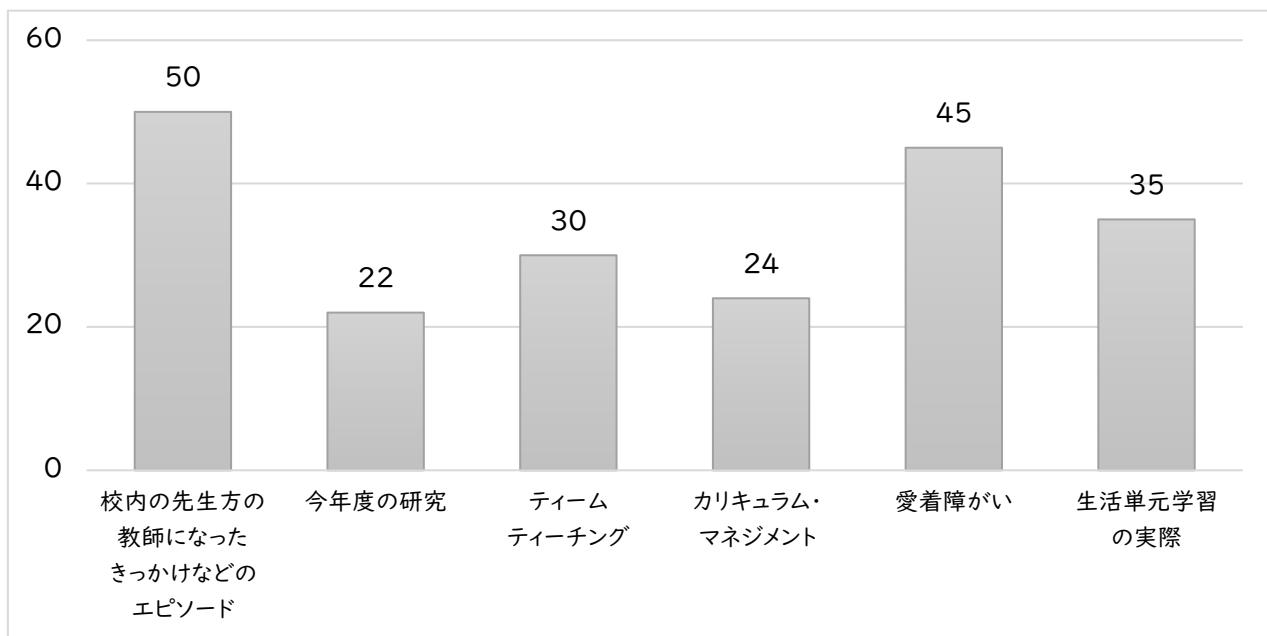


図8 アンケート結果(良かった内容の人数)

才 相互授業参観について

昨年度ニーズは高かったが、実施することが難しかった相互授業参観について、今年度は試行的に実施した。実施方法としては、(図9)前月の中旬に校務支援システムで公開可能な授業のアンケート調査を行い、前月下旬にアンケートをまとめ、全職員に公開可能な授業を周知した。また、授業の参観については、個々の職員のやりとりとし、それぞれの空き時間等で対応をお願いした。準備物についての規定を設けず、気軽に公開できるようにした。

図9 相互授業参観計画案

相互授業参観について（案）

研修部

1 目的

校内で行われている授業について相互に参観する機会を設定することにより、職員（若手職員を中心に）の授業力の向上を図る。

2 方法

- ・ 公開可能な授業（もしくは、学級・職員）を以下のカテゴリに沿って募集し、参観授業リストを作成する。（6月くらいまで）

【期間】 いつでも（年間を通して） 期間指定（いつからいつまで）

日時指定（いつ） 授業指定（いつ）

【授業】 各教科（国語 社会 数学 音楽 美術 保健体育 職業 家庭 情報 特活 道徳）

各教科等を合わせた指導（生活単元学習 日常生活の指導 作業学習）

【対象学部・学年】 小学部 中学部 高等部 1・2・3・4・5・6学年

- ・ 職員それぞれが、リストを参考に、参観可能な授業者に連絡（ミライム等）し、参観を行う。
- ・ 参観をした職員は、参観後、授業者（と研修部）へ学んだことや自身の授業へ活かしたいことをミライムで送付する。

※ 資料等の準備は、授業者の可能な範囲で行う。

※ 授業の参観については、授業者の都合でキャンセルすることができる。

※ 参観が難しくなった場合は、双方ともに連絡をするようにする。（直前に難しくなる場合もある）

※ 参観や公開については、それぞれ全職員（寄宿舎職員も含む）を対象とする。

3 その他

- ・ 昨年度決定している中堅研修の授業、指導教諭が公開する授業についても同様にリストで案内する。
- ・ リストの更新は月1回とし、公開に承諾いただいた授業者へ連絡を行い、月1回ミライム掲示板で案内をする。
- ・ 今年度実施する教科・領域等総合訪問の授業についても参観対象とする。

その結果、7月から2月まで、毎月5~7名程度の職員が授業を公開した（毎月公開した職員もいるので、年間を通して授業公開した職員の合計は16名であった）。公開された授業は、小学部から高等部までであった。内容は、国語、算数・数学、美術、職業、家庭などの教科の学習や生活単元学習、作業学習など各教科等を合わせた指導、自立活動まで様々であった。

授業を参観したのは、5名の職員で、参観した職員は、全体の1割にも満たない状態であった（図10）。

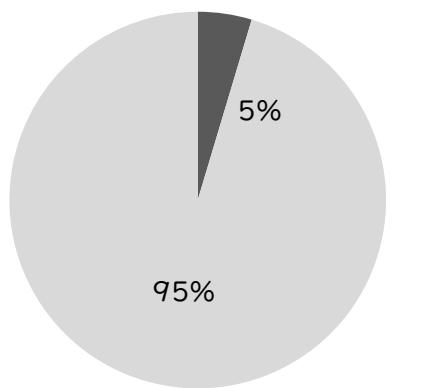


図10 アンケート結果（授業参観の有無）

また、相互授業参観の課題と改善策について自由記述式でアンケートを取ると（図11）、参観の重要性を認識し、他の先生の授業を参観したいという意欲は高いものの、担当学級を空けることが難しく、参観の機会を得られないことを残念に感じている声が多く上がった。特に小学部では空き時間がなく児童から目を離せないため、授業を抜けることが困難であるという意見が多く見られた。また、改善策については、「小学部の先生方が自分の学級を空けても罪悪感を覚えない雰囲気づくり」、「補教を組みやすくする環境の整備を行う」、「学年ごとに参観可能な週を設けるといった工夫をする」、「ニーズ研修において各学部の授業の様子を写真や動画を交えながら紹介する機会を増やす」、「ビデオ撮影を活用する」などが挙げられていた。

- ・ 見に行きたいが、クラスを空けられない。
- ・ 空き時間のない小学部、目の離せない児童のいる学級では、他の先生方の授業を参観したくても、自分の学級をあけることがなかなかできません。ただでさえ、補教が組めず常に人が足りない状態である。
- ・ とてもいい機会だと思っていますが、なかなか見に行けず毎回残念です。
- ・ 参観したいが、時間をもらいにくい。
- ・ 担当学級の授業を抜けることになるため、限られた時間のみ参観しかできなかつたが、可能であればどんどん参加したいと思った。
- ・ 取組としては魅力的だが、参観できる余裕がないという現状があった。
- ・ 小学部は空き時間がないので他の先生の授業を参観することができません。

図11 アンケート結果（相互参観授業の課題について）

7 研究のまとめ

(1) 研究Ⅰ

① 成果

研究Ⅰにおいては、学習指導要領に対応した教育課程、教育活動の見直しということで、2か年を通じて、学校全体で年間指導計画の作成に取り組んだ。日常生活の指導、国語、算数・数学、音楽、図画工作・美術、体育・保健体育、特別活動の年間指導計画については12年間を見通せるものが形としては出来上がった。今年度の校内研究の終了段階での年間指導計画は巻末資料①の通りである。

本校の年間指導計画は、学部ごとに異なる様式で作成されており、学びの系統性が整理されていないことが課題とされていた。しかし、本研究を通じて、小学部から高等部まで統一した様式で整理することができたことは、大きな成果である。これにより、小学部から高等部を通じた一貫性・系統性のある指導へつなげていくための基盤が整いつつあると言える。

また、今年度の校内研究についてのアンケートを実施し、校内研究に関わった職員132名のうち100名から回答を得た。その中で、「新たに分かったこと」「授業づくりや日々の指導に役立ったこと」などを問う記述式の質問では、学習指導要領や星本に関する記述が32%を占めた。具体的には、「学習指導要領を再読する良い機会になった」「星本の解説を読むことで、授業内容や他教科との関連について理解が深まった」といった意見が見られた。さらに、「他学部の年間指導計画を知ることができた」「小中高でつながりのある学習の重要性を改めて実感した」など、一貫性・系統性に関する記述も12%あった。

また、「校内研究を通して学びがあった」など、自己の学びについての記述も19%あり、これらを合わせると、63%の職員が個人的に肯定的な成果を感じていることが分かった。さらに、学習指導要領や星本の活用についての選択式の質問では、「普段から参照している」と回答した職員が43%、「校内研究をきっかけに授業づくり等で参照するようになった」と回答した職員が24%であった。

このように、年間指導計画の作成を中心とした校内研究を通じて、学習指導要領を参照する機会が増え、それが日々の授業づくりにも活かされるようになったことが示唆された。

② 課題

(ア) 年間指導計画の作成に関して

今年度の年間指導計画の作成に関しては、いくつかの課題が明らかになった。

まず、生活単元学習については、各学部の1年生分の年間指導計画は完成したものの、2年生以上の年間指導計画は未完成となった。特に中学部の年間指導計画では、「夏のくらし」「〇〇に行こう」など、季節や行事に関連するものが多く、学習指導要領に示された指導内容をすべて履修できる計画にはなっていなかった。また、指導内容に偏りがあることが判明し、特に生活や理科、社会などの教科別の指導が行われていないため、未履修の内容も多いことが課題として浮かび上がった。生活単元学習の年間指導計画は、各教科との関連が多いため、今年度の校内研究の時間内では十分な時間を確保できず、完成には至らなかった。そのため、次年度も継続して取り組み、完成を目指す必要がある。

また、生活単元学習以外の年間指導計画については、形としては完成したものの、その内容を十分に精査するまでには至らなかった。小学部から高等部までの学びの連続性を重視した一貫性・系統性のある指導を実現するためには、作成した年間指導計画が実際の指導場面で活用できるかどうかを検証することが必要である。しかし、今回の校内研究では、班別の研究時間のすべてが年間指導計画の作成に充てられ、授業での検証を行う余裕はなかった。今後は、作成した年間指導計画を試行的に活用しながら、授業を通じて検証を行い、必要に応じて修正を加え、計画のブラッシュアップを図ることが求められる。

更に、今回は、日常生活の指導、生活単元学習、国語、算数・数学、音楽、図画工作・美術、体育・保健体育、特別活動についてのみ年間指導計画の作成に取り組んだ。校内研究の時間で作成していくこと、そして、縦割りのグループで作成していくことから、小学部から高等部まで共通して教育課程に位置付けられているものに限定した。そのため、中学部や高等部のみ教育課程に位置付けられている作業学習や家庭の年間指導計画については、未作成である。学習指導要領解説総則編において、各教科等については「全ての児童生徒に履修させること」(文部科学省、2018)と示されていることから、指導内容の取りこぼしがないよう、小学部から高等部まで教育課程に位置付けられている全ての各教科等の年間指導計画を整備していくことが今後の課題となる。

(イ) 年間指導計画の活用について

今回は年間指導計画の作成が校内研究の中心となったため、その活用方法について十分に検討することができなかった。そこで、次年度以降に年間指導計画を活用する方法を探り、実践していくために、校内研究に関わった職員 132 名を対象にアンケート(図12)を実施し、年間指導計画の活用に必要なものについて質問した。

「年間指導計画」を活用するためには、必要だと思うものは何ですか。	
星本や星本の教科書解説を充実させる	40%
12年間分の年間指導計画を、全職員が閲覧できるようにする	54%
学級ごとに1年間の単元題材配列表を作成し、各教科等それぞれどの段階で指導したかが見通せるようにして、カルテに挟んで引き継ぐ	17%
児童生徒がどの段階の年間指導計画で学習したのかを年度末に個別に記録し、カルテに挟んで引き継ぐ	34%
授業計画案を作成する際、ある程度統一された様式で作成し、作成する度に全職員で共有できるフォルダに保存し、閲覧できるようにする	32%
その他	6%

図12 アンケート結果(年計の活用に必要なものについて)

その結果、100 名から回答が得られ、最も多かった回答は「年間指導計画を全職員が閲覧できるようにする」で 54%を占めた。現在、年間指導計画は学部ごとに異なる様式で作成されており、学校全体で共有されていないため、所属学部以外の指導計画を身近に閲覧できる環境が整っていない。この結果を踏まえ、学校全体で 12 年間を見通して作成した年間指導計画を活用しながら、児童生徒の学習指導を行えるよう環境を整備する必要があることが明らかになった。

次に多かった回答は「星本や星本の教科書解説を充実させる」で 40%であった。星本は学習指導要領に基づき指導内容を網羅することを目的に作成されており、今回の年間指導計画作成においても参考書籍として活用された。また、別の質問では「学習指導要領や星本を普段から授業づくり等で参照している」が 43%、「校内研究をきっかけに授業づくり等で参照するようになった」が 24%という結果であった。このことから、星本の周知が進み、学習指導要領に沿った授業づくりを行う上で、星本を参考にしたいと考える職員が増えていることが伺える。今後、年間指導計画に基づく授業づくりを進めるためにも、星本を含めた参考資料を多くの職員が活用できるよう整備することが望ましい。

「授業計画案をある程度統一された様式で作成し、全職員で共有していく」ことについては、32%の回答があった。年間指導計画に沿って授業づくりを進める際、各単元や題材に基づいた授業計画案を作成し、それを全職員で共有できるようにすることで、同じ単元や題材であっても学習グループや児童生徒の実態に応じた多様な授業展開を把握できるようになる。このことは、より良い授業づくりに寄与するとともに、職員の専門性向上にもつながると考えられる。この取り組みについては、次年度の校内研究における授業検証の中で具体的に進めていけるとよい。

さらに、児童生徒がどの段階の年間指導計画で学習してきたかを引き継ぐ方法についても課題が残る。アンケート結果では、児童生徒ごとの記録を残す方法や、学級ごとの一覧表を毎年作成して保管する方法など、複数の案が挙がっており、今後の検討課題として位置づける必要がある。

参考事例として、福島県立相馬支援学校では、令和4年度の研究「資質・能力を育むための単元研究会からのカリキュラム・マネジメント」の中で、職員に向けた環境整備の一環として、各教科等の単元案を蓄積して閲覧可能にしたり、文部科学省著作の星本をはじめとする授業の参考書籍を整備したりすることで、授業準備や構想にかかる時間の短縮を図る取り組みが紹介されている。本校においても、小学部から高等部までの12年間の学びの連続性を全職員が意識しながら、年間指導計画を活用した授業づくりを進めることができるように、職員に向けた環境整備が必要であると考えられる。

(ウ) 次年度の研究内容について

今回の校内研究では一定の成果が得られたものの、学習指導要領に対応した教育課程の見直しについては、引き続き継続して取り組む必要がある。また、作成した年間指導計画については、授業検証を重ねながら内容を精査し、必要な修正を行い、完成を目指していきたい。さらに、年間指導計画の具体的な活用方法についても、次年度に整理を進めることが重要である。そして、次年度末には今回の研究成果を研修部から教務部へ移管し、本校の年間指導計画として再来年度の教育課程に位置付けられることを目指したい。

(2) 研究2

本年度の校内研修は、障がいのある児童生徒の教育に関する専門性を高めるとともに、職員研修について組織化・体系化を検討し、教育活動の活性化を図ることを目的に実施した。特に、「それぞれが知りたいことを気軽に、いつでも、どこでも、主体的に学べる」研修体系の構築を目指し、全体研修、ニーズ研修、オンデマンド研修（NISE 学びラボ）、研究通信、相互授業参観の 5 つの取組を実施した。

以下に、それぞれの取り組みについて、本年度の課題を踏まえて次年度の方向性を述べる。

① 全体研修（対面、悉皆）

全体研修は、今年度の校内研究を踏まえた基礎的、基本的な内容を 3 回実施した。職員のアンケートからは、3~4 割と満足度は、低い状況であった。アンケートの自由記述などを見てみると、「基礎的な内容が多く、すでに知っている内容だった」、「昨年度聞いた内容であって、繰り返しの必要性を感じなかった」など、職員間の専門性に幅があるため、全員が同じ内容で研修を受けることの弊害が反映していると思われた。

次年度は、悉皆研修の効果をさらに得るため、研究テーマの継続・深化を図りつつ、基礎と応用などグループ分けをし、具体的な実践例を交えた内容を盛り込んだり、ワークショップ形式を取り入れ、職員同士の交流を促したりするような工夫を検討したい。

② ニーズ研修（対面、任意）

ニーズ研修は、職員の半数以上の参加が見られ、複数回参加している職員もいること、指導の役に立つというアンケート結果から、8 割以上の職員が有効であったと回答していることから、本取組の目標に非常に合致している内容であったといえる。

次年度は、参加率や満足度のさらなる向上に向け、研修のテーマ選定に職員の意見をより反映し、実際の指導場面と結びつく内容を強化できるよう、研修後のフォローアップ（短時間の振り返り会など）や日々の授業をサポートする継続的な研修の導入を検討したい。

③ NISE 学びラボ（オンデマンド、任意）

オンデマンドによる NISE 学びラボの研修は、昨年度に続き、研修への参加率（受講率）と満足度が高く、「それぞれが知りたいことを気軽に、いつでも、どこでも、主体的に学べる」というテーマに合致した研修になったと思われる。研修の準備にあたる職員の登録作業も年度毎に更新を必要とするが、そこまで煩雑な作業でないため、費用対効果が抜群の研修であると思われる。

次年度も、引き続き実施をし、さらなる学びを促進するために、視聴した内容を共有する、発表する場の設定も検討をしていきたい。例えば、簡単な報告会や意見交換会、研究通信におすすめコンテンツを乗せるなど、インプットだけでなくアウトプットを促すような取組も検討する。

④ 研究通信（オンデマンド、任意）

研究通信は、多くの職員が読み、役立つ内容となった。昨年度に引き続き、「教師になったきっかけ」は、興味をもって読んでいただける定番コンテンツとなっており、昨年度にニーズが高かった「愛着障がい」についても好評であった。

次年度は、アンケート結果から、関心が高かったテーマ（事例紹介、特別支援教育の動向、求められる職員像など）について、取り上げるとともに、インタビュー記事など、多様な内容を検討したい。

⑤ 相互授業参観

相互参観授業は、幅広い内容の公開をすることができたが、参加者が非常に少なく、課題の多い内容となつた。理由として、多く挙げられていたこととして、担当学級を空けることが困難であり、特に小学部では児童の特性上、授業を抜けることが難しいことがあった。

次年度は、実施について検討が必要であるとともに、「授業のビデオ撮影を活用する」、「参観のための補教体制を整備し、職員が参加しやすい環境をつくる」、「学部や学年ごとに参観週間を設定し、参加を促」、「ニーズ研修において各学部の授業の様子を紹介する機会を増やす」などの取組を検討したい。

以上、それぞれの取組について、課題を踏まえて次年度の研修に向けて、まとめを行った。次年度は、より実践的で学びの定着につながる研修を目指し、研修の内容や方法の工夫を進めていく。

【引用・参考文献】

- 文部科学省(2018) 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編(幼稚部・小学部・中学部) 開隆堂
文部科学省(2019) 特別支援学校学習指導要領解説総則等編(高等部) 開隆堂
文部科学省(2020) 特別支援学校小学部・中学部学習評価参考資料
文部科学省(2022) 特別支援学校高等部学習評価参考資料
福島県立相馬支援学校(2022) 「資質・能力を育むための单元研究会からのカリキュラムマネジメント」